

# 中学生からの 熱いメッセージ

対馬少年の主張大会

第5回 対馬少年の主張大会



発表者の皆さん:最優秀賞の中山さん(前列中央)をはさんで優秀賞の原くん(左)と一宮さん(右)

市内の中学生12名が、学校や家庭生活の中で感じた様々な意見を発表する第5回対馬少年の主張大会が2月19日、対馬市公会堂で開催されました。

審査の結果、最優秀賞を獲得したのは、厳原中学校2年の中山理成さん。「人生はそこから」という発表題で、命の大切さについて発表しました。

中山さんは、少年の主張長崎県大会に対馬市代表として参加します。また、東部中学校2年の糸瀬美咲さんが、平成18年度「社会を明るくする運動」中学・高校生長崎県弁論大会の対馬代表に選ばれました。結果は次のとおりです。(敬称略)

### 《最優秀賞》

中山理成(厳原中2年)「人生はそこから」

### 《優秀賞》

一宮聡恵(厳原中1年)「本当の賢沢」

原 清澄(豊玉中2年)「今、日本語は...?」

### 《入選》

島居まみ(佐護中2年)「自分を誇れる生き方を」

武田健吾(比田勝中2年)「仲間、その時、あの出会い」

堀出憂也(雞知中1年)「部活にける僕の思い」

鍵本貴大(加志々中2年)「一本のたすきにける思い」

平山真衣(西部中2年)「今を生きる私達のメッセージ」

部原敏貴(久原中2年)「将来の夢」

竹藤稲美(南陽中1年)「とても大事な一言」

市川龍太(浅海中2年)「よき日の為に」

糸瀬美咲(東部中2年)「大切なこと」

## 人生はそこから

中山理成



人は誰しも夢、つまり目標を持っています。そして、その実現のために、その目標にすがりつくように努力して日々を過ごしています。しかし、その目標が突然にして断たれてしまったとしたら...、私たちはどうなってしまうのでしょうか。

私も実は、ほんの少し前までは何度も『死のう』と思い続けていました。原因は、クラスメイトからのイジメにありました。何か事件が起きれば、す

ぐ濡れ衣を着せられ、日に日に、クラスの邪魔者のような存在になっていきました。そんな時、私はリストカット、通称リスカと出会いました。

リスカは、その時の私にとって最高のものでした。嫌なことすべてが忘れられる気がするのです。なんの対処にもならず、傷だけがそこに残ることを知りながら、私はどんどんリスカに溺れていきました。

ちょうどそんな頃、一人の女の子が転校してきました。

ある夜、厳しい現実には耐えられなくなった私は、4階の自宅ベランダの鉄格子の外に立っていました。あとは、つかんでいる手を離すだけ、これだけ苦しみから逃れられる...と。その時、視線を感じ下を見ると、そこには、あの女の子がいました、私をじっと見つめ

る彼女は「とばへんの?」と声をかけてきました。そして「とぶ気がないなら、やめたほうがええで、そういって」と言葉が続けたのです。動揺を隠せない私に彼女は「気にしすぎちゃう?もつと自信もつたら」という言葉を残して去って行ってしまいました。

「自信を持つたら...」その言葉は、どんな優しい慰めよりも私の心に深く響きました。自分らしさ、自分の良さ、私は自分を振り返ろうともせず、相手に求めてばかりいたのではないだろうか。自分は悪くない、悪いのは私ではなく周りだと、人を責めてばかりいたのではないか...そう思いました。

その後、私は対馬へ転校し、彼女と会う機会はほとんどありませんが、彼女はかけがえのない友達、そして命の恩人です。リスカをすることはもうあ

りません。生々しい傷跡が私の腕から消えることはありません。でも今、私は生きています。そしてあの苦しい時とは違い、目標を持って楽しく、強く生きています。

私は過去の出来事から多くのことを学びました。心の痛み、苦しさ、出会いの大切さ、命の大切さ、そして「生きることの素晴らしさ」など。

私の未来にはいったい何が、待ち受けているのでしょうか。楽しいことばかりではないと思います。しかし、私は何億分の1の確率で授かった大切な命。この命を力いっぱい輝かせて、1日1日を大切に生きていこうと思います。

(内容の一部を抜粋し、掲載しています)

小田大地さん(美津島町)最優秀賞を獲得

第9回対馬地区漁協青壮年部 意見発表会



対馬地区漁協青壮年部連絡協議会(扇平会長)主催の第9回対馬地区漁協青壮年部意見発表会が1月28日、美津島町で開催されました。

この大会は、漁協青壮年部の日頃の活動や漁業体験を通して感じたことを発表し、融和と団結を図ろうと行われているもので、青壮年部から6名が参加し、10分間の制限時間内で発表を行いました。

審査の結果、美津島町の小田大地さんが最優秀賞を獲得。2月10日に長崎市で行われた第24回県漁青連意見発表会に対馬代表として参加し、ここでも最優秀賞を受賞しました。

小田さんは現在25歳。美津島町で真珠の養殖に携わっています。

小田さんの発表の一部を紹介します。



発表者の皆さんと発表作品

峰町「変わり行く対馬の海」山崎重幸さん  
 厳原町「漁業を取り巻く環境問題」小森張市さん  
 豊玉町「漁協青年部に感謝」作元政志さん  
 上対馬町「島に生きる」篠田良治さん  
 上県町「海との共存・今、守るべきもの・・・」(優秀賞)高野幸司さん  
 美津島町「季節に生きる宝石」(最優秀賞)小田大地さん

最優秀賞を獲得した  
小田大地さん



「季節に生きる宝石」

養殖を始めた平成12年3月、父に言われたのは「仕事を憶えることはいらん。それよりこれから何年たとうが日々毎日、同じ時間、同じ場所で、水温計りをかかすな」と、ただそれだけ。その時はなぜ水温計りばかりで、養殖のイコ

ハを覚えてくれないのかと納得いかず、きつく汚い仕事に苛立ちを感じていた。

数カ月後、浅海青年部総会で、父の真意が見えた出来事があった。当時の水産普及指導センター所長と話をする中で、父が母体となる貝に着目すべきだと言っていると聞かされた。

真珠は出来上がるまで、ゆうに3年半から4年という月日を費やす。数十年という対馬の真珠養殖の歴史のなか、技術面に着眼点を置き、確かに真珠養殖は一大産業として発展を遂げたが、近年は異常気象などで、技術面だけでは品質の維持が困難になってきた。しかし、父は良質の真珠を生み出すと早くから貝に注目

し、必ず真珠養殖は大量生産の時代から品質を上げるしかない時代が来ると言っていた。現在確かにその時代がやってきた。

質より量の中国産真珠、海外に喜ばれる南洋真珠の大きいサイズなど、自分たち日本伝統のアコヤ真珠が危機的状況にさらされている。自分たちはアコヤ真珠の特徴である白さの中に、淡くピンクが射すアコヤにしかない真珠を作るしかない。貝にこだわるわけがこれだった。

しかし、貝にこだわるだけが自分に伝えたい真意ではなかった。

貝とは生き物であるということだった。父が祖父から仕事を受け継

いで数年のころ、数年にわたる海の環境調査を行い、季節ごとに化する水温と餌を把握し、貝の成長に最も適している層域を示した。

水温を知ること、そこに生きるエサの量を知り、それを必要とする貝の状態をも知ることが出来る。すべてはつながっているのだと。すべての根源である海。それを知ることこそが始まり、水温を極めることが一流の真珠屋への一歩だと伝えられたと心から感じた。

ある時、色づく桜を見てふと思ったことがあった。四季の移り変わりも養殖にかかわりがあるのではないかと。観天望気という言葉がある。四季の移り変わりを目で見、肌

に触れるということ。浅茅湾では、真珠養殖のなかで必要な卵抜きという作業で、ネムの花が咲く頃に卵が抜けるといった言葉があるくらい、先輩たちも遠い昔から流れる季節を見て、自分と同じことを考えていたのだと思いが知らされた。

科学的根拠の基礎となる水温計りと、先人たちの知恵である観天望気。これこそ真珠養殖における真の原点。またそれは、私たちが命の事業に携わる者にとって、業種の枠を超え、すべて同じではないだろうか。

真珠養殖は母体である貝を見、貝を感じ、貝と共に生きるいわば生きた宝石を作る唯一の産業。

自分が目指しているのは、持つ人にささやかな喜びを与える真珠。真珠には作る人の生き方が映し出されるもの。自分の一挙手一投足に自信と心をこめて、気持ち伝わるような真珠を作りたい。この仕事は成果がすぐにはでない。忍耐と知恵そしてなにより、希望をもつことが大切であると考え。